

私たちの未来

編集にあたって

中田眞城子 | (正会員) mplusplus (株)

近頃シンギュラリティという言葉が一般紙でもちらほらと目にするようになった。Raymond Kurzweil 氏^{☆1}のシンギュラリティに関する書籍の翻訳が出版され、ソフトバンクグループ CEO 孫正義氏が30年後に起こるシンギュラリティに備えて1,000億ドルの投資をしたという報道やシンギュラリティサロン^{☆2}のような会合が定期的で開催されるようになったことが要因だと思われる。今回寄稿いただいた松田卓也先生のご尽力も大きい。しかしながら、シンギュラリティ自体は100年ほど前からあった概念である。数年前まで研究者以外にはあまり知られていなかっただけでもかかわらず、まるで新発見されたことのように語られ、同時にコンピュータやAIの進歩に懐疑的な人が出てきた。「コンピュータに仕事を奪われるのではないか」「人がコンピュー

タに支配されるのではないか」などと心配をする。これまで気にもとめていなかったはずなのに気になりはじめたのはなぜなのだろう。景気の落ち込みや大きな自然災害に見舞われ、原発の安全性が問われているうちに自分たちで明るい「未来」を想像することをやめてしまったのかもしれない。そうであるならもっと「未来」を想像する機会を大人たちが作らなければこれからの世代は元気がなくなってしまう。

私が子どもだったころ、30世紀の宇宙で生活する家族を題材にした「宇宙家族ジェットソン(The Jetsons)」^{☆3}というテレビアニメがあった。朝起きるところから洗顔、着替えも自動、家や会社の中では椅子に座ったまま移動し歩くことはほぼない。空を自動運転で移動する乗り物で出かけ、普段は感情をむき出しにするロボットのお手伝いさんとともに

^{☆1} ポスト・ヒューマン誕生(原題 The Singularity is near)
<https://www.nhk-book.co.jp/detail/000000811672007.html>

^{☆2} 2015年より東京と大阪で月1回定例会が開かれている
<http://singularity.jp/>

^{☆3} アメリカで製作されたテレビアニメだが1962年から1963年に日本でも放映されていた。現代の視点から描くリブート版がRobert Zemeckis総監督によって近々実写ドラマ化されるらしい



生活する明るいホームドラマだったのだが、そんな生活に私は違和感を感じていなかった。というか、そのころ子どもたちは大体こんな感じの「未来」があるのだろうと素直に思っていたのではないだろうか。小学校の先生も子どもたちに、未来の乗り物、未来の海の中、など未来の〇〇の絵を描くことを求め、子どもたちもなんのてらいもなく海に突っ込んだ道路を走る水陸両用車やロケットの窓から身を乗り出して手を振る人など、未来を夢一杯に描いていたように思う。現実「宇宙家族ジェットソン」に出てきた未来の技術は実現しているかあるいは技術的に実現可能なことがほとんどの世の中となった。さてそのころの未来を体験している我々が想像するさらなる未来とはどんなものなのか。「AKIRA」では新型爆弾が爆発し、「攻殻機動隊」では第三次世界大戦が起り、「エヴァンゲリオン」ではセカンドインパクトが起こった荒廃した都市がバックボーンとなっている。主人公たちは力強く生きているものの、

何か危険なものが待ち受けている。映画もしかり、SFとはいえ本当にそんな怪しい未来予測？でいいのだろうか。明るい生活を送っているのは「サザエさん」「ちびまる子ちゃん」「ドラえもん」に出てくる昭和の人々だけでいいのだろうか。そのためにもまずはさまざまな分野の専門家の方が未来をどのように考えているのか聞いてみたいと思ったのがこの小特集のきっかけだ。

執筆者の皆さまには、5年後10年後の予測のつく未来ではなく、さらにその先の未来を想像を交えて書いていただければお願いした。

会員の皆さまだけでなくご家族の方々にも読んでいただき、若い世代が未来を肯定的に考え、前に進めてくれるようになれば願っている。

(2017年10月29日)